

## 千葉大学災害治療学研究所&福島県立医科大学 合同シンポジウム in 2023 を開催しました

令和 5 年 8 月 23 日に福島県立医科大学光が丘キャンパス（災害医学・医療産業棟）にて、福島県立医科大学と災害治療学研究所との合同シンポジウム（第 2 回福島ワークショップ）が行われました。今回のシンポジウムには、量子科学技術研究開発機構放射線医学研究所の神田所長、栗田医長、今年度本研究所に設置した「原子力・放射線災害治療学共同研究部門」の浅沼特任教授、新日本空調株式会社の宮下様、大堀様、毎沢様にもご参加いただき、3 つのテーマにより、それぞれご講演、発表を頂き、活発な質疑、意見交換が行われました。



開会の挨拶を行う災害治療学  
研究所所長 田中教授

シンポジウム 1 では、「福島原発事故の教訓とレジリエンス社会に向けた産学の実践」をテーマに、福島県立医科大学放射線健康管理学講座の坪倉主任教授より「原子力事故にともなう二次的な健康影響の実態」、新日本空調株式会社原子力事業部の大堀様より「福島原発事故対応と独自開発技術」と題して研究活動や技術開発について発表がありました。



（左）健康影響について  
語る坪倉教授

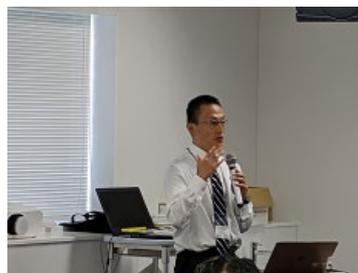


（右）独自技術開発に  
ついて発表する大堀様

続いて、福島県立医科大学放射線健康管理学講座博士課程の松本様より「東日本大震災および福島原発事故での経験」について、放射線医学研究所被ばく医療部の栗田医長より「放射線災害に備える 被ばく医療体制の充実化に向けた取り組み」について発表がありました。



（左）経験を語る松本様



（右）取り組みについて説明  
する栗田医長

現在、世間では、福島第一原子力発電所事故後の ALPS 処理水を海洋放出することが決まり、その対応も新たなフェーズに向かう中で、将来に向けた取り組みが注目を集めています。本シンポジウムでは福島原発事故からの教訓と長期的視点から捉える健康科学的な課題点と、それに基づく未来志向型

の産学の先端的取り組みが、とてもわかりやすく講演され、活発に議論されました。

シンポジウム 2 では、「災害疾患レジリエンスの構築へ ～病態・予防・評価～」をテーマとして、本研究所の小野寺教授より「DNA 修復とエピゲノム」、放射線医学研究所の神田所長より「放射線障害の予防や治療の根幹：線量評価について」の発表がありました。また、講演セッションとして福島県立医科大学健康管理学講座伊東助手より「浜通り地域の復興の現状と健康課題 葛尾村を例として」の発表を頂きました。



エピゲノムの研究について  
発表する小野寺教授



放射線の線量評価につ  
いて発表する神田所長



被災地の現状と課題に  
ついて語る伊東助手

本セッションでは、実践的フィールドワークから浮かび上がった住民の復興と健康課題、病態基盤の分子メカニズムの先端的知見、まさかの時の備えに関する実践とサイエンスに基づく線量評価と病態把握の最新の知見と手法の発表があり、この領域の専門家のみならず、多くの災害関連医療従事者や研究者にとって、とても意義のある講演でした。

シンポジウム 3 では、「実践的災害レジリエントシステム ～救急医療・減災・防災～」をテーマとして、千葉大学大学院医学研究院救急集中治療医学 中田教授より「救急医療 Dx の取り組み – Smart119 について –」と題して、また、本研究所「原子力・放射線災害治療学共同研究部門」の浅沼特任教授より「減災サステナブル技術とその災害治療学への貢献」について発表がありました。



(左) Smart119 について  
説明する中田教授



(右) 減災・防災技術につ  
いて発表する浅沼特任教授

地球温暖化に伴う異常気象がグローバルに起こる中で、活発化する台風被害、線状降水帯に伴う局地的豪雨災害、熱中症による救急搬送患者数の増加、地震のハイリスク、新型コロナとインフルエンザの同時感染流行の感染症災害など、多様な災害に伴う多岐にわたる健康被害が大きな社会問題になると同時に、地域の医療圏ごとの実情が大きく異なり、救急医療・減災・防災のあり方が問われています。

本シンポジウムでは、医学視点を取り入れた工学系の減災サステナブル技術およびレジリエントシステム構築への貢献や、救急医療デジタルトランスフォーメーション（DX）の新たな実践的取り組みなど、産業と行政と医療の融合、そして工学系×医学系×災害治療学という、ウェルビーイング(Well-being)のレジリエンス社会の実現に向けた新たな風を期待させる講演でした。



シンポジウムの終わりに挨拶をする  
千葉大学大学院医学研究院/研究院長  
災害治療学研究所副所長 三木教授

#### 《三木先生ご挨拶》

今回は、昨年続く第2回目の福島ワークショップでした。この1年間で、千葉大学と福島県立医科大学が連携して活動してきた過程で、我が国の放射線医学研究のメッカである放医研（QST）や、原子力施設の空調で我が国のリーディング企業である新日本空調株式会社の目指す方向性や理念が、両大学の取り組みと重複する部分を多く有していることが分かってきました。今回のシンポジウムでは異分野融合を一つのテーマとしておりましたが、お互いの強みとする分野を理解し、深い討論を重ねることができました。多くの参加者にとっても、今後様々な共同開発・研究が発展する可能性を感じることができた素晴らしいシンポジウムであったと思います。

翌日の8月24日には、千葉大学—福島医科大学—放医研（QST）—新日本空調（株）による産学連携、共同研究について意見交換、打ち合わせを行いました。

また、「目に見えない脅威に対する備え、現状とこれからの課題」について、ビデオ撮影を行いながら、意見交換会を行いました。本ビデオは、後日 HP 掲載予定です。





最後に力強い  
拳を握り合同シ  
ンポジウムを締  
めくりました。